

## 干潟は水が腐っているわけではない



干潟。灰色の粘土をぶちまけたように見えるので外観が悪く、非常に多く誤解されているが、実際はその発揮する光合成効果が極めて高く、環境浄化の働きは熱帯雨林や珊瑚礁に匹敵する極めて有用な自然界の恵みである。その神秘的な仕組みを知ったらいかに神秘的、奇跡的な営みがなされているかに改めて感嘆することであろう。

干潟は大きく2つに分類される。

### 1. 砂干潟

砂が混じっており比較的硬い。陸地の付近が砂浜になっていてアサリなどがとれるもの。

### 2. 軟泥干潟

泥混じりの干潟で、ムツゴロウやカニ、貝類、ゴカイなどといった水生物が多く生息するもの。川が海に流れ込む汽水域にのみ形成される。干拓で破壊された九州の諫早湾や有明海はもっとも有名。

一見するとそのビジュアルは汚らしく見えるあの干潟がなぜ、自然界の浄化作用を持っているか。それは、干潟においては汽水域であるので淡水と海水が交互に入れ替わるが、ここへ川からの水が流れ込むとその川の水に含まれている二酸化炭素、有機物や栄養塩類(窒素やリン)が、干潟の微生物によって旺盛に食されることで海水として流れ込む前に濾しとられるからである。つまり、**天然のフィルター**であり、ゆえに驚異的な浄化作用を持っているのである。

さて、この干潟、なぜか九州には世界的にも極めて珍しい大きな干潟が多い。伊万里湾、諫早湾や有明海など複数の県にまたがり非常に広範な干潟を形成している。かくも大きな干潟は九州固有の小さな河川だけではとても形成できないのであるが、それにもかかわらずなぜここにこうした広い干潟が形成されたかご存じだろうか。

実はこれ、かつて日本列島とユーラシア大陸とがまだ繋がっていた時に、世界の大河、揚子江(長江)と黄河が九州に直結していたから形成されたものである。だから、同じ九州でありながら、2つの大きな干潟に生息している生物には、長江系と黄河系とではっきりした違いが見られ、そのDNAも分類ができる。つまり、世界の大河がか

つて繋がっていたからこそできあがった奇跡の巨大干潟であると言えるのである。

その後、大規模な造山活動によるプレートテクトニクスで列島が大陸と切り離され、今のように島国になってから九州の干潟は大陸と切り離された。ゆえに2つの大河を抱える大陸中国の干潟が、この20年ほどの著しい環境破壊によって見るも無惨に破壊されてもなお、太古の恵みを保ってきたのである。

それを完膚無きまでに破壊したのが例の農水省が強行し、行政訴訟で差し止めを暗いながらも今なお強行し続けている巨大干拓事業である。私はこの「超大型公共事業」をこり押しし、この事業に寄生して利益をあさっている官僚や政治家、土建業者の連中を絶対に許せないと考えている。

さて、このことについて勘違いをしている人がいらっしやるので触れておきたい。村上密牧師(プロテスタントのペンテコステ系キリスト教教会、アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団・京都教会)が、1月23日付の執筆で『語ること聞くことの大切さ』として、干潟は水が腐った地帯であったがここに人工的に河川を作って干拓し、水はけを改良して穀倉地帯に変えたことは素晴らしく、悪水を抜くことの意味を人間の心の中にある悪水に例えて述べている。

彼が伝えたい主張は干潟の干拓の必要性ではなかろうが、たとえ話をするならば適切な客観性を持った引用をしなければならない。干潟は「水腐地帯」ではない。全く逆で自然の生態系にとっては極めて有用なものであり、そこにある水は腐った悪水ではない。こうした初歩的な認識の誤りはたいへんに有害である。彼以外にも、最もひどい場合は干潟とヘドロと似たようなものだと勘違いしている人がいるが、もちろんそれも完全な間違いである。

新潟の古い地図を見た時、潟の多いのにびっくりしました。この潟や低湿地は、水はけが悪いため、水腐地帯となっています。人々は溝や堀、人工河川を作って、水はけを良くし、干拓をしてきました。川の氾濫原は土地が肥えていますので、明治の始め頃には人口も日本一、米の収穫量も日本一になっていました。水腐地帯が穀倉地帯になったのです。

人の心も同じだと思います。悩み苦しみが心の中に流れ込み、行き先を失って、潟になっています。悩み苦しみが心の中に溜まったままだと、悪水ぬきが必要です。話

を親身になって聞いてくれる人は溝や堀のような存在です。悪水のはけ口になってくれるからです。良くない聞き手は、悪水を逆流させます。悪水をぬけば、悩み苦しみも心の肥やしになり、その人の心を沃野にします。

注：これは言われずと知れたブログ「現代の風景 随想 吉祥寺の森から」の以下のURLに掲載されていた記事である。

<http://blog.livedoor.jp/mediaterrace/archives/50392154.html>

掲載されたのは2010年以前だったはずだが、現在は削除されている。

上記ブログの著者である杉本徳久氏は、現在、かつて村上密に少しでもたてついた「恥ずべき」過去の記録は、すべてなかったことにしたいというわけなのであろう。

この記事では、かなり偉そうなもの言い、村上をいさめていたことが分かるが、その後、村上に「あなたは思い込みが強い」「カルト被害者を誰が助けるのか」とクレームをつけられ、あっさり降伏宣言してしまったのである。

しかし、この記事で当初、杉本が言いたかったことも、干潟の有用性ではあるまい。

- ・干潟＝カルト被害者
  - ・悪水＝人間の苦しみ
  - ・公共事業＝村上の宗教トラブル相談センター
  - ・汚水のはけ口＝村上密のようなカウンセラーや牧師
- と読み替えれば、隠れた文脈が浮き出て来る。

干潟は「水腐地帯」ではない。そこに光合成によって神秘的なほどの自然の浄化作用が働き、人の目にはすぐにそれとは分からないが、様々な富が宿っているのであって、干潟を無用なものとして破壊し、穀倉地帯に変えようなどという短絡的な発想は、自然破壊・環境汚染でしかなく、断じて間違っているとの主張には、相当にうなずけるものがある。

同様に、カルト被害者は宗教洗脳されて人生を破壊された人々などではなく、彼らが受けた苦しみの中に、彼ら個人の人生だけでなく、全社会にとって有益な教訓が含まれていると見ることができる。そこで、人の苦しみを「悪水」にならえて、無用なもののみなし、「カルト被害者」を、一方的に人生を破壊された可哀想な人々とみなし、彼らから苦しみを取り除いて、何の苦難も受けることのなかった普通の人々のように「社会復帰」させることだけが最終目的であるかのように考える短絡的な発想では、決して本当の意味で、人間の心の苦しみにも、人間という生き物の本質にも向き合ったことにはならない。

人が自分から無用な苦しみを背負う必要はないとはいえ、苦しむことそのものが悪なのでもない。人間は生きていればいくらでも不条理にぶつかる。ただ悩み苦しみとは無縁の幸福そうな生活を送り、表面的に喜んで、ハッピーに振る舞ってさえいれば、それが人間の幸

福なのでもない。

それにも関わらず、苦しみを一方的に悪と決めつけて、これを「悪水」や「汚水」になぞらえ、苦しみを取り除くことで、人間が幸せになれるかのような短絡的な発想は、結局、苦しむ人々への侮蔑を生んで行き、最終的には、苦しむ人々の排除という最も残酷な結末を生むのである。

それはちょうど、干潟を「汚らしいヘドロのたまった汚泥地帯」とみなして、これを埋め立てて、きれいなビル群を建てたり、穀倉地帯を作ることこそ、「近代化」であるとする短絡的な計画や、あるいは、ハンセン病の患者を全員隔離して、病に感染しない人々だけを社会に残せば、幸福な社会ができあがるとみなした「無らい県運動」などの計画と同じように、まさに苦しむ人々自身をタブーとして、彼らを根こそぎ社会から排除し、苦しみなど一切知らない「ハッピーな人々」だけを社会に残せば、幸福で、調和の取れた、理想的な社会が生まれるとみなすおぞましく狂気じみた計画の数々を生んで行くのである。その結果として生まれるものは、幸福社会どころか、まさにディストピアでしかない。

この記事の著者は、こうして人間の苦しみを何かあるまじきもの、無用なもの、劣ったもの、無価値なものともなし、苦しみを取り除いて、うわべだけ幸福そうな人間を作り出すことを「最終解決」と考える発想の恐ろしさに気づきかけたがゆえに、村上密の推進するカルト被害者救済活動の欺瞞性を指摘しようと、この記事を書いたのであろう。

それにも関わらず、村上からカルト被害者を盾に取って抗議を受けると、自らの疑問を封印し、最終的には、この記事削除することで、こうした記事を書いた事実までもなかったことにしたのである。

どこまでも光に目を背け、暗闇へひた走って行く人々である。

だが、言うておけば、干潟を水腐地帯だとみなす者が、自ら水腐地帯となるのである。苦しみを無用なものともみなす者が、自分自身を無用な者として行くのである。

人間の苦しみの中に、どれほど有用な自然の働きが込められているか、それがどれほど長い醸造期間を経て、人の中に忍耐強く練り清められた人格を作り上げていくか、考えることさえなく、ただきれいごとだけで塗り固めた、嘘の「幸福」を唱える彼らには、自分こそが、本当は教会で最も心傷つけられた被害者だという事実は、もはや死んでも告白できまい。

**こうした初歩的な認識の誤りはたいへんに有害である。**